様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：７４３０６
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｈ０１３５６

研究課題名（和文）弥生時代高地性集落の列島的再検証

研究課題名（英文）Reexamination of Yayoi period hill settlements in Japanese archipelago

研究代表者
森岡　秀人（Morioka, Hideto）

公益財団法人古代学協会・その他部局等・客員研究員

研究者番号：２０６４６４００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,400,000円

研究成果の概要（和文）：考古学上熟知されてきた高地性集落は、年代論を根幹とする歴史の大きな枠組みが破綻する中で、歴史的評価が著しく多様化し、大きな転換期 を迎えている。そこで、「弥生時代高地性集落の列島的再検証」と題する本研究では、これまで蓄積された調査成果・研究業績を踏まえつつ、 利用可能となった新たな技術も用いながら、列島各地における高地性集落の時期、立地、遺構、遺物、分布などの実態を総合的に検討し、その 歴史的性格を実証的に再評価する。今日、学校教育では偏った弥生時代のイメージが流布しているが、本研究を通して今後の高地性集落研究の指針となる新たなフレームを構築し、そのイメージを修正することにも寄与する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
弥生時代の高地性集落の研究は、長期にわたって続けられてきたものの、最近の科学年代測定の普及や遺構・遺物の調査・研究の深化によって、見直しが図られ、盛行時期やその機能・性格に齟齬を生んできた。教科書でも頻繁に取り上げられる研究テーマであるため、軍事的防御的性格の一元的説明だけでは特殊な社会状況に偏りがちな記載となり、学校教育現場にも大きな影響をもたらしている。今どのようにとらえるのが正しいのか、弥生社会全体の評価や最新の歴史像の描き方にも大きく作用するため、本研究の成果は、学術的意義のみならず、社会に早く還元されることが不可欠と思われる。

研究成果の概要（英文）：The upland settlements, well known in previous archaeological study, is now at a major turning point in the diversification of historical evaluation due to the collapse of the historical framework based on chronological dating. This study, entitled "An Archipelagic Reexamination of Yayoi Upland Settlements," comprehensively reexamines upland settlements and its previous study throughout the archipelago, including their chronology, location, archaeological remains, and distribution using new technologies for empirical reevaluation. Today, a biased image of the Yayoi period is prevalent in school education, but through this study, we will contribute to correcting this image by constructing a new frame to guide future research on upland settlements.

研究分野：弥生時代

キーワード：弥生時代　高地性集落　眺望　戦争　交易

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１.研究開始当初の背景

(１)本研究は人類生活を覆う 700 万年の長い歴史を通して、最も根源的な衣食住のうち「住」の問題に焦点を当てるものである。その中でも特殊性が問われてきた弥生時代の「高地性集落」の性格や機能の解明、選地の営みの思考回路の再検証を目指したものである。考古学の研究史上、縄文時代にもみられる高所や平地からの比高差立地での居住も注目されていたが、「高地性集落」という専門用語が広く考古学界や歴史学界に使用され始め、学校教育現場の教科書でも恒常的に登場するようになったのは、やはり弥生時代の集落研究の深化によるところが大きい。とりわけ戦前の森本六爾による低地・高地の両性遺跡の対比に関する素描は、その研究の原点として説明されることが多い。他方、中山平次郎・柴田常恵・高橋健自・山内清男・八幡一郎・藤森栄一なども生業活動と遺跡立地の変動には大きな関心を抱いていた点を見過ごしてはならない。石製武器や青銅製武器の使用にも積極的な注意を払っていた点は重要である。1980 年代中頃、岡本勇は明治時代に活動の足跡をとどめる蒔田鎗次郎の弥生式竪穴着眼の段階に、既に集落立地のありようと環濠や武器類の存在にも看過し得ぬ示教と識見が読み取れるとしており、本研究でも学史の遡上を大きな課題と認識し、再検討の必要性を認めている。今日では弥生社会の発展形態や生業活動、集団関係の研究のみならず、前期古墳の立地研究などとも不可分な位置を占めている現状があり、研究の視野、裾野はその方法の進化とともに、飛躍的に拡大している。調査・研究は多岐にわたって進められており、もはやステレオタイプ的に一つの解釈に束ねることや仲立ちを果たすことも不可能に近い。「高地性集落」の用語自体は 10 世紀の東北北部の竪穴の群棲の立地研究にも弥生時代とはまったく無関係に使用をみており、水稲を主体とする初期農耕社会に特化されるものではない点にも注意が必要である。

(2.)弥生時代研究史において関心の高い位置を占めてきた高地性集落遺跡の研究は、立地条件の特異性も手伝って、昭和時代戦前から先にあげた森本六爾や樋口清之をはじめ、著名な考古学者が遺跡踏査を原点とする基礎的調査と論説を残し、農耕社会の本格的研究において看過できない視点であることを明らかにした。戦後は、各地で本格的な発掘調査が行われるようになり、山口県を中心に小野忠凞による西部瀬戸内地域の考古地理学的な研究視角が加わり、農業を基盤とする弥生時代の社会の居住における垂直的遷移の異常現象としての考察が前進した。その歴史的背景として、中国史書などに記された「倭国乱」「倭国大乱」（『魏書』東夷伝・『後漢書』倭伝など）との関係性など、当時の対外関係や地域動向を射程に入れ、集落立地の人文現象の枠組みにおいて大いに議論の進展をみた。

それらの研究は、1960 年代に飛躍的に取り組まれるようになり、日本列島で勃発した弥生時代後半期の動乱が引き起こした集落の一時的な高所選地と争乱の具体的痕跡、証左としての側面のみが強調される研究動向へと展開した。具体的資料の増加と研究の蓄積により、1970 年代には全国レベルでこの方面の研究の動きが注目され、総合的研究の兆しも芽生え、各地で研究者の実践的な取り組みが行われるようになった。それらを牽引した小野の着目は、古墳時代の開始を説明する視点などを都出比呂志が引き継ぐ経過を示すなど、時代区分を超越した実りある集落論として定着した。

農耕社会にとって全く不便な立地を示す高地性集落遺跡は当初考えられていたほど特殊な性格の遺跡ではなく、農耕社会のベクトルに入ったからこそ、必然的な成立を余儀なくされたものであり、古墳出現の動向を射程にできる弥生時代後半段階の遺跡分布と機能の考察への問題関心の移行ももたらした。

(３)このたび 2020 年度から 2023 年度の 4 年間にわたって行われた学振科研〔基盤研究 B〕「弥生時代高地性集落の列島的再検証」（研究代表者：森岡秀人）は、上記した研究の動きを通時的に理解し、ほぼ半世紀振りに取り組んだこの種集落の解明を目指した総合的研究の第２弾として位置付けられるものであり、かつて研究全体をリードした小野が大きな課題として代表者に託されたさまざまな宿題に挑む研究上の積年の背景と漲る意欲がベースとなったことを強調しておきたい。

２.研究の目的

(１)衣食と住を基軸とした弥生人の人間活動の全期間を俯瞰した時、住の根幹部に位置する居住形態、集落の立地や構造の果たす役割は非常に大きい。自然環境や日々の生業とも密接不離な関係にあって、とりわけ弥生時代は水田稲作の初期農耕活動に至便な場所に集落を営み、定住性をすこぶる高めたことが明らかである。大小の集落が地域を限っても離合集散を繰り返しつつ点々と分布しており、必然的にネットワークを形作り、集団間の接触も水利条件や交通ルートがより一層重視されてくる。この時代の後半期ともなれば、水田経営には適さないイレギュラーな高所での集落占拠が無視しえない数営まれており、こうした現象が争乱など人文現象や気候変動とも深く関わるとみた議論が敷衍する。その背景には、紀元前後に 1000 年以上の長い時間の経過もあり、その盛行の波の適確な時期を腑分けしつつ把握することも不可欠な課題として、その解明を目的とした。

今回の研究プロジェクトでは、それらを基軸にして、地域から発せられる機能の多様性、遺跡固有の性格を容認する方向で発展させ、過去では向き合えなかった方法論や機器類の開拓にも挑戦し、社会背景を備えた遺物の個別研究にも焦点を当てた。加えて衆目を引く問題軸として「そ

もそも高地性集落とはいったい何か」とする根源的な問いに関しても、忌憚のない概念形成の齟齬の比較検討を中心に、研究の土壌に偏りをみせないように配慮した。
このような状況のもと、研究の最大の目的として弥生時代高地性集落の多様性追求を掲げ、最初から結論ありきの過去の研究からは脱し、新しい視角から既往の報告例も根底から見直す姿勢を貫いた。「脱高地性集落論」という主張や「高地性」廃止論の展開など、枠づけを避け問題点の提議も積極的に受け入れ、新鮮な議論を俎上に乗せて、実証性の焦点をどこに当てるかを大きな目的に置いた。
(2.)本研究を推進する最大の目的は、倭国乱という中国史書上に記述された事件的年代と遊離する実例が多くなった高地性集落研究の真の意義の回復を目指し、新たな視座を創出することである。従来の研究では、高地性集落自体が歴史的性格を既に担った安定した用語として使用され、年代などの固定化による機能の絞り込みをはじめ、弥生社会研究の刻々の進展に対応した成長的研究が行われていない。
高地性集落という学術用語自体が既に一定の定義と機能固定化の性格を持っており、地域により概念の検討が排除されるような場合もみられる。一時は、高地性集落は西日本の枠組みで論じられる場合が多く、北関東などでは通用といった視点では一種アレルギー的な反応もあった。他方「高地性集落」という用語が、考古学研究を進める上で阻害要因にもなっているとの見方も近年存在し、用語そのものの適用性が問われたりもする。研究情勢はこのように急速に変化し、新たなステージに入っている。
その主要因は実年代論争の進展で、年輪年代測定法やＡＭＳ法を用いた炭素年代法などが登場し、考古年代観より遡り、高地性集落の発現や消滅の年代観が急激に変わってきたことがあげられよう。倭国大乱を２世紀後半とする中国史書の記述に対し、科学的年代観による見直しで、遺跡の存続時期も紀元前２世紀から紀元１世紀というように、従来の弥生時代の年代観からみると、大幅に繰り上る実例もみられ、高地性遺跡の年代や性格をどのように考えるのかというような初期化の問題が新たに生じている。
(３)要するに、高地性集落という術語は、遺跡（実体）と歴史（上位概念、叙述可能な結論）の中間にあるミドルレンジ・セオリー（中範囲論）の域を脱しておらず、未完な研究状況の突破口が不可欠となっていた。その基盤的方法論を練磨させ、実態究明への足掛かりを整備することも目的に置いた。
これまでには試みられなかった本研究上の目的も大切にした。概念の広がり切った弥生時代の高地性集落を研究するには、代表的な遺跡について現状を再認識し、実際に現地踏査して、得られた知見に客観性を持つ記録を作り、それらの早期の公開を目的とした。それらのデータの共有は向後の研究を追試し、調査・研究の裾野を広げることになる。その対象は、西は西北部九州から北陸東部に及んでおり、瀬戸内・大阪湾沿岸、近畿の南北域の要所に留意しつつ、発掘調査が進展した北陸西部、四国東部にも及んだ。
瀬戸内海地域では、柴田昌児愛媛大学教授の率いる科研グループと合同で瀬戸内海の島嶼部や沿岸、半島山頂部の高地性集落を小形船舶に乗船して巡検し、位置を確認して可視範囲の刻々の変化、海上からの眺望をデータ化することを目的とした。芸予諸島・燧灘・笠岡諸島・塩飽諸島・荘内半島の内海路を丸 1 日かけ航行し、これまでになかった海上からの眺望の体感を重視し、その敢行を目的に据えた。

３.研究の方法
(１)埋没環境にある集落跡の研究は、現地の最新の現有自然環境と過去の往時の環境との違いや時間的変化の掌握が重きをなす。とりわけ高地性集落の研究では、遺跡の変容を可能な限り当時に戻しつつその可視距離、可視範囲など眺望条件の実態調査と客観的計測表示が不可欠である。その性格や機能の議論を進化させるためには、主観に頼った現況の踏査記録だけでは不十分と思われる。したがって、本研究においては、軌道に乗っている GIS（地理情報システム）やドローンによる 360 度の視界情報の動画取得や三次元測量の知識・技術を導入し、視覚的にも追体験をなしえる分かりやすい形態により、代表的な高地性集落の情報を順次取得し、データは整理の上、公開発信する
(2.)瀬戸内海の島嶼部や半島部の高地性集落を小船舶に乗船し、海上から望見して、実体験を通して高地性集落の視認、距離感、望見視野などを広く観測し、弥生時代中期の瀬戸内海環境をより現実的に理解する。目的に掲げた瀬戸内西部の芸予諸島、中部燧灘、北岸笠岡諸島、瀬戸内東部南岸塩飽諸島、荘内半島など全日海域を巡行し、視認範囲の移り変わりや眺望対象などの動きを実地に掌握する。紫雲出山遺跡山頂部からの観測者との相互視認状況の連絡を多くの考古学研究者を乗せた船から行う。これは高地性集落研究史上初の試みと言え、当然弥生時代の往時との諸条件は異なるものの、実りある実証的な観測記録を残すことが期待された。

４.研究成果
(１)研究開始初年度の令和２年度（2020 年度）は、新型コロナウィルス感染症蔓延の影響をもろに受け、各地の遺跡踏査・遺物調査ともに大きな制限下、可能な限り実施せざるを得なかった。オンラインほか非常事態宣言下の研究環境の整備を各自行い、高地性集落のデータベース構築のための遺跡立地概念の検討、共通項目の設定、フォーマット作成などの協議を５回にわたって行った。研究発表会並びに研究討議、意見交換を 2 回開催した（ハイブリッド方式）。過去の弥

生時代集落遺跡のデータベース活用の方法も検討、模索し、大阪府・京都府を中心に作業の合理的な移行を進め、データの抽出格納を行った。集落遺跡の現地再検証を行うのに必要な諸器具・備品類（大型測量用ドローン・小型望遠鏡・アクションカメラなど一式）の購入、研究拠点配備を進め、兵庫県会下山遺跡・城山遺跡や奈良県天理市などで試験飛行を実施、データを取った。眺望データや踏査動画、写真撮影など再現性可能な記録・情報を取得し、保存した。
研究分担者・研究協力者は地域単位で高地性集落の立地や条件（基本データ）の検討を進め、地域研究の基盤作りを進行させた。調査した関係遺跡は、群馬県中高瀬観音山遺跡、西部瀬戸内地域、芸予諸島の島嶼部立地の高地性集落、愛媛県八堂山遺跡、高知県鷹ノ巣山遺跡、新潟県長岡市上桐の神社裏山遺跡などであり、専門遺物調査は新潟県裏山遺跡砥石分析、兵庫県六甲山系の高地性集落出土土器・石器・青銅器などの資料の検討を分担して実施した。地理情報システム（GIS）を活用した高地性集落の眺望・立地分析、眺望域、標高・比高の対比観測などを実施した。高地性集落の客観的な抽出法を議論し、その相互の有効性を比較しつつ、地域を超えた普遍性に関しても試案、検討する。また、成果を各所で発表し、研究の浸透と普及を心掛けた。弥生時代高地性集落の全国的研究を約 50 年ぶりに行うことは、研究の進化と科学技術の向上を背景として新しい視座から取り組む意義があり、既に報告され、一定の成果が出ている遺跡についても現今の学問的水準に立って再検証を果たすことができた。
実年代観の大幅な変化や集団諸関係の研究の進展を受け、新しい弥生社会像を描く基礎として、高地性集落の解明を共同研究していく試みは重要であり、初年度はその足掛かりを築いたと言える。なお、研究の中間報告を兼ね、『季刊考古学』第 157 号「特集：高地性集落論の新しい動き」を研究代表者が編集し、雄山閣からの刊行を目指す作業を開始した。そして、2021 年 10 月に刊行予定で、原稿を細かく分担した。
(2.)令和３・4 年度（2021・2022 年度）は、引き続き新型コロナウィルス感染症蔓延の影響を受けた2.年であったが、研究活動を持続した。高地性集落の現地踏査及び出土資料熟覧（土器・石器・青銅器・鉄器・動物遺存体）の再検討作業を本格的に推進した。合同調査では、兵庫県神戸市城ヶ谷遺跡（4 次）、京都府田辺天神山遺跡、奈良県御所市中谷遺跡・境谷遺跡・国見山遺跡、岡山県赤磐市用木山遺跡・四辻遺跡・便木山遺跡、佐賀県唐津市湊中野遺跡・雲透遺跡・鏡山山頂遺跡・桜馬場遺跡・宇木汲田遺跡・大友遺跡を対象とし、主要な北部九州の関連弥生遺跡も巡検した。実地踏査できた遺跡については、ドローンによる周辺景観撮影写真・動画を取得した。大阪府和泉市惣ヶ池遺跡に関しては、発掘調査期間中に銅鏡出土状態や鉄器工房内部施設の詳細観察調査や竪穴構造の検討を実施した。また、学史上重要な位置を占める島田川流域遺跡群（山口県岡山遺跡・天王遺跡など）の個別調査を行い、眺望動画を得た。
遺物調査では、個別に京都府八幡市美濃山遺跡、大阪府高槻市紅茸山遺跡、明石市東野町遺跡などの所蔵資料（土器・鉄器）を熟覧観察した。東日本の東京都八王子市鞍骨山遺跡、調布市染地遺跡・下布田遺跡、神奈川県海老名市河原口坊中遺跡、厚木市子ノ神遺跡なども個別調査した。並行して、高地性集落における木材調達や貝類採捕活動、製塩活動など、特殊生業面の実態についても積極的に分担し、調べた。研究の中間成果は、『季刊考古学』157 に「高地性集落論の新しい動き」と題する特集を鋭意組み、研究過程、内容の一部を公にした。また、研究内容の相互確認と分野を超えた専門的討議を行うための研究会を 2 度開催した（9 月・3 月）。データベース作成に際しては、立地条件・位置情報・帰属時期・遺構・遺物などの基本項目に則し、合意形成をみたフォーマットを作り、西日本の特定の地域を悉皆して 303 遺跡の抽出を行い、リスト化した。
令和 4 年度も引き続きコロナ禍の蔓延の波と調査状況のタイミングを見て行動制限下、可能な限り高地性集落の現地踏査と過去の出土資料の再検討を行った。とりわけ概念や定義のキーポイントになる遺跡を選択し、この年度においては紀伊・北陸・東四国、遺物調査が残留していた北部九州唐津方面の赴き、必要とする資料観察の成果を得た。本科研から一部助成で行っている新潟大学考古学研究室の長岡市赤坂遺跡の発掘調査現場も現地を視察し、実証された弥生後期後半の北陸圏最大の環壕と出土遺物の実態、科学年代の遺構内遺物での検証過程を確認した。関連して北陸側の要所では、越後（新潟県村上市山元遺跡、新潟市新津八幡山遺跡）、加賀（石川県金沢市観法寺山遺跡）、越前（福井県鯖江市弁財天遺跡）などの現地調査を進め、紀伊（和歌山県和歌山市橘谷遺跡・滝ヶ峯遺跡）の現地並びに遺物調査、和泉の惣ヶ池遺跡の整理中遺物の全体調査を実施し、石川県埋蔵文化財センターや新潟市文化財センター、金沢市文化財収蔵庫、和歌山市立博物館にて関連資料を調べることによる遺物相・年代比定・日常活動やその比重に関する基本データが確保できた。交流の証左となる外来系土器の様相の確認、鉄器化の証しとなる砥石の具体的変化も掌握した。個別調査としては、古墳時代前期にも残存する天理市豊田山遺跡、別所裏山遺跡の土器を再検討することができた。
（３)新型コロナウィルス感染症の行動制限期間とほぼ重なるという異例の調査・研究期間であったが、所定の研究目的や計画をかなり進行させ、予想以上の研究活動が実施できたと総括できる。昨年５月にコロナ 5 類に移行してから今日まで、研究集会の成果の見直しも同時に行ってきたが、2024 年 3 月末をもって苦難な環境下粛々と行ってきた 4 年間にわたる本科研の研究活動も一応終了することができた。社会への研究の還元を第一義とした公開シンポジウム（会場：京都市　同志社大学）を開催した。
テーマに既往の調査・研究の「再検証」を掲げた本研究は、実に半世紀振りに実施された弥生時代高地性集落の機能や性格を解明しようとする総合的研究であり、過去に大々的に進められた

小野の研究プロジェクト（科研）に匹敵する約 50 名の陣容でもって、4 年間の研究に注力した。本研究のねらいは、弥生時代の高地性集落の既存の学説に基づき、さらに一元化を目途にしたものではない。個々の研究の方向性に一定の制約をつけ、足並み揃えをけっして目論んだものではなかった点が大きな特徴である。実証資料の再調査に基づき、共通資料を点検して遺跡の機能・性格について自由奔放に持論を唱え、共同研究という大枠はあるけれど、予定調和的な結論の導きを拒む結果となった。調査・研究動向の近状を互いに再検証しつつ、この 50 年の多様化した研究動向で可視化されてきたこと、加えて若い世代を要とするユニークな研究成果を互いに排斥することなしで忌憚なく提示し合い、相互批判により議論の内容を高めた。研究の次の飛躍へと繋げることが最大のねらいであり、結果として、狭量な概念規定の設定や擦り合わせのみに終始せず、研究の多彩化と自由化を加速させることができた。4 年間の研究で、高地性集落の認識や研究がより一層多様化している現状が露呈したのである。

（４)地理情報システム（GIS）を活用した高地性集落の眺望・立地分析は本科研の実効的分析手法の目玉であったが、地方自治体の協力が予想以上に得られ、実践的な調査・研究活動を神戸市スポーツ・文化財課や新潟大学と共同で行い、立地の有効性や機能などをそれぞれ発掘調査報告書に反映させた（城ヶ谷遺跡第 4 次・赤坂遺跡第 2 次）明石平野、明石海峡・淡路島北部に向けての眺望性に言及するとともに、遺跡消長と銅鏡研究から弥生後期前葉に有機的な集落の結びつきがあることを明らかにし、その特質から「青谷・城ヶ谷集団」を浮き彫りにできた。また、和泉市教育委員会との連携により、大阪平野南部の高地性丘陵性遺跡の持つ眺望条件や立地分析を行い、沖積地の池上曽根遺跡とどのような違いがあり、眺望範囲の補完関係がどのようになっているかのデータが得られた。そのことにより、遺跡間の動態と母集団との関係性についても論究が可能となり、その成果を『和泉市史紀要』に反映させた。

その他、研究活動の後半期の成果の中間発表を行う場を得て、『古代文化』第 74 巻第 2・4 号（古代学協会）の特集（上）（下）誌上に示した。最終年度の研究活動ついては、コロナ感染症が 5 類扱いとなり、最も活発化した。高地性集落の研究が広域的かつ持続的に行われてきた瀬戸内海中部地域の島嶼部、半島地形の遺跡を海上から観察する巡航計画を愛媛大学の柴田教授の研究チームと合同して、高地性集落研究史上、初めて実施した（7 月）。響灘を挟む芸予諸島と笠島諸島、塩飽諸島の対象遺跡を巡り、とくに香川県紫雲出山遺跡では、山頂部と船上からの可視領域、視認度の情報を相互交信し、高所立地遺跡の機能や役割を実証的に調査した。紫雲出山遺跡に関しては、京都大学所蔵資料を重点的に調べ、畿内の大阪湾沿岸と四国・山陽地域の影響度、関係性の濃淡を土器・石器・金属器の各方面から討議し、畿内優位とする従来の考え方とは異なる所見を得た。関連して、岡山県・山口県・奈良県・新潟県などで分担個別研究を深めた。

(５)本科研でリストアップされた高地性集落に関しては、データベースの構築に向け、保有資料の整備を進め、研究期間終盤に公開に向けての準備作業を行い、約 400 遺跡について基礎情報を整備し、標識的な主要遺跡に関しては公開した。半世紀前の研究プロジェクトの集成資料とは、その分布状態、時期の変化などに有意な叙述が行われるようになった。瀬戸内・大阪湾岸・淀川水系・京都盆地・琵琶湖西岸・北陸西部・同東部といった地域では、群棲的な連動波及の様態を捉えることが可能となり、高地性集落が西日本から東日本に向けて、日本海側で古墳時代に転換する動態の一端を掌握した。この間、10 月には韓国から日中韓の東アジア高地性集落の国際学術シンポジウムが初めて開催され（ソウル、高麗大学校)、居住活動の非日常的なありようについて、移住集団の外的要因、青銅器時代・鉄器時代の高所立地集落の構造的理解を共有し得た。研究の長い日本列島の諸事例も、関心の深まる研究過程とともに研究代表者がアウトラインを紹介できたことは、研究の機運が東アジア規模に広まり、普及する契機をなした。東アジア日中韓で初めての『高地性集落』の国際シンポジウムであったと言える。主題は「東北アジアにおける青銅器時代の高地性集落の現況と様相」である。研究代表者が韓国から日本代表の発表者として依頼を受け、発表したもので、各国発表題目のすべてに「高地性集落」の用語が使われており、もはや東アジアでもポピュラーな研究対象であることが明確な国際会議となった点が特筆される。日本の弥生時代の集落遺跡研究ではアジア最古の研究が始まっていたことに敬意を示されてのお誘いであり、開催日は 2023 年 10 月 20 日である。日本からの発表題目は「日本列島の高地性集落の形成と展開様相」。雄山閣から『韓日初期複雑社会の集落体系の比較 GIS を用いた空間考古学的検討』を出版されている姜東錫教授の依頼であり、向後の東アジアを舞台とする高地性集落の共同研究がこの場で固く約されたことは、時宜に適ったこととして付記しておく。

(６)最終年度の 3 月２日には、4 年間の科研の研究成果をとりまとめ、公開普及のシンポジウムを開催した（同志社大学今出川キャンパス、210 名参加)。総ページ 160p の要旨・資料集を刊行し、当日参加者・発表者に配付するとともに、調査協力機関・資料提供機関や主な研究機関・博物館・資料館に送付し、研究内容の還元に務めた。

以上、調査・研究の進捗状況をリアルタイムで中間過程としていち早く世に出すことができた、新鮮な内容を最終晩期には公開、普及した。計三度にわたって雑誌特集号を編み、その一端を示した。森岡編の 2021、森岡編の 2022、森岡編の 2023 がそれらである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計70件（うち査読付論文　14件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 森岡秀人	４．巻 233
２．論文標題 弥生後期社会の実像シンポ　総括コメント③	５．発行年 2022年
３．雑誌名 古代学研究	６．最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森岡秀人	４．巻 －
２．論文標題 シンポジウム『製塩土器の流通からみた播磨の生業』	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『第21回播磨考古学研究集会の記録　製塩土器からみた播磨』	６．最初と最後の頁 94-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森岡秀人	４．巻 －
２．論文標題 大和・布留遺跡と高地性集落の問題―豊田山遺跡と別所裏山遺跡の立地と消長を中心に（断章）―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『ここまで判った布留遺跡―物部氏以前とその後―』発表資料集	６．最初と最後の頁 203-209
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森岡秀人	４．巻 72-2
２．論文標題 特集：弥生系高地性集落の再考論（上）に寄せて	５．発行年 2022年
３．雑誌名 古代文化	６．最初と最後の頁 42-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森岡秀人	4．巻 9
2．論文標題 高地性集落と紀伊産大和型庄内形甕の摘出―和歌山市滝ヶ峯遺跡出土土器の熟覧観察とその成果―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 古墳出現期土器研究	6．最初と最後の頁 127-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森岡秀人	4．巻 74-4
2．論文標題 弥生系高地性集落の再考論（下）』に寄せて	5．発行年 2023年
3．雑誌名 古代文化	6．最初と最後の頁 45-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森岡秀人	4．巻 74-4
2．論文標題 特輯論攷の論点と総括、研究展望	5．発行年 2023年
3．雑誌名 古代文化	6．最初と最後の頁 91-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森岡秀人	4．巻 16
2．論文標題 弥生時代後期から終末期の近畿社会と大中集落	5．発行年 2023年
3．雑誌名 兵庫県立考古博物館研究紀要	6．最初と最後の頁 89-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 荒木幸治・伊藤淳史・桐井理揮・清水邦彦・瀬谷今日子・戸塚洋輔・中井和志・田中元・三好玄・森岡秀人・山本亮・渡邊誠	4．巻 233
2．論文標題 弥生後期社会の実像－集落構造と地域社会－	5．発行年 2022年
3．雑誌名 古代学研究	6．最初と最後の頁 3-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宇佐美智之	4．巻 74-2
2．論文標題 GIS眺望分析を用いた高位置集落における眺望域の評価：中部瀬戸内地域を事例として	5．発行年 2022年
3．雑誌名 古代文化	6．最初と最後の頁 90-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 桑原久男　宇佐美智之　森岡秀人	4．巻 2
2．論文標題 現地踏査およびUAV・GIS眺望分析にもとづく赤坂遺跡の立地特性の検討	5．発行年 2023年
3．雑誌名 新潟大学考古学研究室調査研究報告	6．最初と最後の頁 66-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 桑原久男　宇佐美智之　森岡秀人	4．巻 －
2．論文標題 眺望分析、遺構・遺物の特質からみた『青谷・城ヶ谷集団』	5．発行年 2023年
3．雑誌名 城ヶ谷遺跡第4次発掘調査報告書：神戸西バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査	6．最初と最後の頁 85-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 寺前直人	４．巻 74-4
２．論文標題 南関東地方の弥生系高地性集落－生業・経済と集団関係－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 古代文化	６．最初と最後の頁 71-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 寺前直人	４．巻 －
２．論文標題 ヤジリは武器なのか？－関東からみた弥生時代のヤジリ論－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 南関東の弥生文化－東からの視点－大阪府立弥生文化博物館令和４年度夏季特別展図録	６．最初と最後の頁 72-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 桑原久男	４．巻 74-4
２．論文標題 前期古墳の立地と高地性集落	５．発行年 2023年
３．雑誌名 古代文化	６．最初と最後の頁 48-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 柴田昌児	４．巻 10
２．論文標題 朝鮮半島系準構造船(加耶タイプ)の生産と日韓の造船技術	５．発行年 2022年
３．雑誌名 纏向学研究	６．最初と最後の頁 527-536
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 柴田昌児	4．巻 10
2．論文標題 新谷森ノ前遺跡出土前期弥生土器の年代測定とその意義	5．発行年 2022年
3．雑誌名 紀要愛媛	6．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 若林邦彦	4．巻 74-2
2．論文標題 大阪平野における弥生時代以後の集落移動頻度の検証－弥生高地性集落理解の前提－	5．発行年 2022年
3．雑誌名 古代文化	6．最初と最後の頁 79-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森貴教	4．巻 766
2．論文標題 砥石から読みとる弥生時代の鉄器化－新潟を対象として－	5．発行年 2022年
3．雑誌名 月刊考古学ジャーナル	6．最初と最後の頁 15-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森貴教	4．巻 134
2．論文標題 器・鉄器からみた新潟の弥生時代－広域的な交流と特質－	5．発行年 2022年
3．雑誌名 新潟県考古学会連絡紙	6．最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森貴教・五十嵐文子・村田友輝	４．巻 22
２．論文標題 坂遺跡第２次調査出土微細金属片のX線CT分析・元素分析	５．発行年 2023年
３．雑誌名 新潟大学考古学研究室調査研究報告	６．最初と最後の頁 54-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 森貴教・月山陽介	４．巻 22
２．論文標題 赤坂遺跡第２次調査出土砥石の検討	５．発行年 2023年
３．雑誌名 新潟大学考古学研究室調査研究報告	６．最初と最後の頁 59-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 森貴教　林大智	４．巻 48
２．論文標題 小松市立博物館所蔵の柱状片刃石斧について	５．発行年 2023年
３．雑誌名 石川県埋蔵文化財情報	６．最初と最後の頁 11-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森貴教・山崎頼人	４．巻 34
２．論文標題 長岡市大武遺跡出土の無文土器系土器について	５．発行年 2023年
３．雑誌名 新潟考古	６．最初と最後の頁 115-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森貴教　柚原雅樹　平尾和久　川野良信	４．巻 18
２．論文標題 海徳寺遺跡出土片刃石斧生産関連資料の岩石学・地球化学的分析と考古学的意義	５．発行年 2023年
３．雑誌名 島市立伊都国歴史博物館紀要	６．最初と最後の頁 35-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森貴教　青木要祐　佐々木繁喜	４．巻 28
２．論文標題 上越市下馬場遺跡出土黒曜石製「石偶」の石材原産地推定	５．発行年 2023年
３．雑誌名 環日本海研究年報	６．最初と最後の頁 53-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山本亮	４．巻 74-4
２．論文標題 列島東縁の高地性集落・高所立地集落の展開	５．発行年 2023年
３．雑誌名 古代文化	６．最初と最後の頁 56-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森岡秀人	４．巻 157
２．論文標題 古今東西、高地性集落行脚の50年	５．発行年 2021年
３．雑誌名 季刊考古学	６．最初と最後の頁 14-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森岡秀人	４．巻 157
２．論文標題 銅鏡の早期流入と高地性集落	５．発行年 2021年
３．雑誌名 季刊考古学	６．最初と最後の頁 56-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上田裕人	４．巻 157
２．論文標題 高地性集落研究の画期と諸段階	５．発行年 2021年
３．雑誌名 季刊考古学	６．最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 荒木幸治	４．巻 157
２．論文標題 「高地性集落」の意味と基礎分析―高地性集落の抽出と相対化―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 季刊考古学	６．最初と最後の頁 30-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 柴田昌児	４．巻 157
２．論文標題 瀬戸内海，芸予諸島の高地性集落	５．発行年 2021年
３．雑誌名 季刊考古学	６．最初と最後の頁 37-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 福家恭	4．巻 157
2．論文標題 淀川水系における研究の進展	5．発行年 2021年
3．雑誌名 季刊考古学	6．最初と最後の頁 41-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川部浩司	4．巻 157
2．論文標題 「高地性集落」をとりまく環壕の意義	5．発行年 2021年
3．雑誌名 季刊考古学	6．最初と最後の頁 45-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 國下多美樹　菊池望	4．巻 157
2．論文標題 青銅器の流通と高地性集落	5．発行年 2021年
3．雑誌名 季刊考古学	6．最初と最後の頁 52-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鶴来航介	4．巻 157
2．論文標題 高地性集落と木工活動	5．発行年 2021年
3．雑誌名 季刊考古学	6．最初と最後の頁 75-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森岡秀人	4．巻 8
2．論文標題 庄内式期の高地性集落について―北摂・紅茸山遺跡出土土器の熟覧検討とその素描―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 古墳出現期土器研究	6．最初と最後の頁 137-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 桑原久男	4．巻 157
2．論文標題 瀬戸内地域の高地性集落研究に学ぶ	5．発行年 2021年
3．雑誌名 季刊考古学	6．最初と最後の頁 18-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 深澤芳樹・浅井猛宏・荒木幸治・石井智大・杉山真由美・田中元浩・中井和志・三好玄・山本亮・渡邊誠	4．巻 231
2．論文標題 近畿地方南部地域における弥生中期から後期への移行過程の検討	5．発行年 2022年
3．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6．最初と最後の頁 71-210
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山本亮	4．巻 104-2
2．論文標題 近畿地方中部における二重口縁壺の系列と変遷―集落域および周溝墓・小型古墳出土の中小型資料を中心に―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 考古学雑誌	6．最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宇佐美智之	4．巻 33
2．論文標題 弥生時代高地性集落における可視領域の検討：近畿地方を例として	5．発行年 2021年
3．雑誌名 立命館地理学	6．最初と最後の頁 55-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森貴教	4．巻 73
2．論文標題 日本考古学研究の動向　（5）弥生時代研究の動向	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本考古学協会年報	6．最初と最後の頁 16-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 柴田昌児	4．巻 763
2．論文標題 総論 海に生きた弥生人の多様性と多義性『海と弥生文化』	5．発行年 2023年
3．雑誌名 月刊考古学ジャーナル1月号	6．最初と最後の頁 3-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 寺前直人	4．巻 12
2．論文標題 弥生・古墳時代における長柄武器の変遷	5．発行年 2021年
3．雑誌名 年報人類学研究	6．最初と最後の頁 137-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宇佐美智之	4．巻 －
2．論文標題 GIS可視領域分析を用いた弥生時代高地性集落の立地と焼土坑の評価	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本情報考古学会講演論文集	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 柴田昌児	4．巻 2020
2．論文標題 準構造船と描かれた弥生船団	5．発行年 2021年
3．雑誌名 青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報	6．最初と最後の頁 19-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森岡秀人	4．巻 －
2．論文標題 近畿地方における弥生時代～古墳時代初頭の金属器生産と社会　淡路島における重要文化財3銅鐸をめぐる諸問題	5．発行年 2021年
3．雑誌名 弥生・古墳時代青銅器研究会　研究発表資料	6．最初と最後の頁 1-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森岡秀人	4．巻 －
2．論文標題 金属器研究の最新研究動向から見た弥生時代から古墳時代への社会変化―果たして、相互研究の整合論の形成へと向かったか―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 近畿地方における弥生時代～古墳時代初頭の金属器生産と社会』国立歴史民俗博物館共同研究公開セミナー発表要旨集	6．最初と最後の頁 103-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森岡秀人	4．巻 ー
2．論文標題 寺沢『弥生国家論』のパラダイム的意義と纒向遺跡の含意	5．発行年 2022年
3．雑誌名 纒向学研究紀要	6．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森岡秀人	4．巻 27
2．論文標題 日本列島弥生コンプレックス　連動と分断と跋行の縺れ	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『考古学リーダー　弥生時代の東西交流～広域的な連動性を考える～』	6．最初と最後の頁 297-313
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森岡秀人	4．巻 17
2．論文標題 〔書評〕増田富士雄 編著『ダイナミック地層学―大阪平野・神戸六甲山麓・京都盆地の沖積層の解析―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ひょうご考古	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森岡秀人	4．巻 7
2．論文標題 『閉鎖系』の近畿第Ⅴ・Ⅵ様式―兵庫県淡路市舟木遺跡出土土器の態様の再検討から―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 古墳出現期土器研究	6．最初と最後の頁 83-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森岡秀人	4．巻 －
2．論文標題 座談会報告・提言　シンポジウムに向けて―土器研究からみえる集団の動きと社会関係―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 遠江・駿河から広がる世界　東海と関東の後期弥生社会と交流	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森岡秀人	4．巻 －
2．論文標題 高地性集落と望楼施設―考古学的な建築物復元と物見櫓の必然性をめぐるコラム―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 考古資料〔遺構・遺物・層位〕から城郭建築〔作事〕に迫る―その可能性と限界を探る―	6．最初と最後の頁 205-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森岡秀人	4．巻 －
2．論文標題 重要文化財の3銅鐸　3銅鐸の実測調査実施とその経過　南あわじ市隆泉寺所蔵中川原銅鐸　日光寺所蔵慶野中の御堂銅鐸・銅舌　慶野銅鐸　3銅鐸書記録とまとめ	5．発行年 2021年
3．雑誌名 松帆銅鐸調査報告書Ⅱ	6．最初と最後の頁 85-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 若林邦彦	4．巻 1
2．論文標題 第2章第1項総論－研究史整理を受ける形で	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『気候変動から読みなおす日本史 第１巻 新しい気候観と日本史の新たな可能性』	6．最初と最後の頁 67-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 若林邦彦	4．巻 3
2．論文標題 第4章 気候変動と古代国家形成･拡大期の地域社会構造変化の相関―降水量変動と遺跡動態から―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『気候変動から読みなおす日本史 第３巻 先史・古代の気候と社会変化』	6．最初と最後の頁 101-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 國下多美樹	4．巻 －
2．論文標題 下弓削銅鐸と京北の地域的特性	5．発行年 2021年
3．雑誌名 上中城跡の研究	6．最初と最後の頁 45-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 柴田昌児	4．巻 3
2．論文標題 瀬戸内海と用木山遺跡からみた山住みの弥生集落と高地性集落	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『2000年前の吉備～;なぜ弥生人は丘の上に住んだのか』山陽団地遺跡発掘50周年赤磐市史跡シンポジウム シンポジウム記録集	6．最初と最後の頁 93-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森貴教	4．巻 27
2．論文標題 砥石組成からみた鉄器化と集落間関係―近畿地方を対象として―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 考古学リーダー　弥生時代の東西交流～広域的な連動性を考える～	6．最初と最後の頁 109-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森貴教	4．巻 17
2．論文標題 玉津田中遺跡出土砥石の検討―近畿地方における鉄器導入の一例―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ひょうご考古	6．最初と最後の頁 16-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森貴教	4．巻 －
2．論文標題 刃の付け方は機能に影響するか―左右交互刃石庖丁による収穫実験から―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『持続する志 岩永省三先生退職記念論文集』	6．最初と最後の頁 249-259
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森貴教	4．巻 10
2．論文標題 東北地方北部の柱状片刃石斧をめぐって―系譜と時期の検討―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『籾』	6．最初と最後の頁 175-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森貴教	4．巻 26
2．論文標題 砥石表面解析の方法と評価―考古資料を対象として―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『環日本海研究年報』	6．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山本亮	4．巻 24
2．論文標題 土器から見た古墳出現期の布留遺跡	5．発行年 2020年
3．雑誌名 「大和布留遺跡における歴史的景観の復元」『研究紀要』	6．最初と最後の頁 70-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山本亮	4．巻 7
2．論文標題 古墳出現期の鴨田・馬場遺跡の検討	5．発行年 2020年
3．雑誌名 古墳出現期土器研究	6．最初と最後の頁 39-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宇佐美智之	4．巻 682
2．論文標題 高地性集落の眺望：GIS眺望分析による弥生時代高地性集落	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『立命館文学』	6．最初と最後の頁 181-197
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 寺前直人	4．巻 38
2．論文標題 弥生時代生業論の課題	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『東京考古』	6．最初と最後の頁 17-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 寺前直人	４．巻 16
２．論文標題 第16回古代武器研究会「弥生時代後半期における金属製武器の普及と防御用施設」の開催にあたつて	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『古代武器研究』	６．最初と最後の頁 ―
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 寺前直人	４．巻 ―
２．論文標題 小田原にもたらされた弥生短剣	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『米を作ると社会が変わる？中里遺跡の ” 弥生的 ” 生活の始まり』	６．最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

〔学会発表〕　計21件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 森岡秀人
２．発表標題 「近畿系弥生小形ボウ製鏡」コメント
３．学会等名 大阪歴史学会考古部会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 森岡秀人
２．発表標題 銅鏡の使用開始と近畿の弥生人
３．学会等名 ＫＧ歴史考古の会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 宇佐美智之　森岡秀人
２．発表標題 全国高地性集落に関するデジタル資料化 およびデータベース化プロジェクト
３．学会等名 「日本文化資源デジタル・アーカイブ国際共同研究拠点」「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」プロジェクト成果発表会
４．発表年 2023年

１．発表者名 桑原久男
２．発表標題 銅鐸と弥生土器の絵画を読む
３．学会等名 第85回銅鐸研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 森貴教　山崎頼人
２．発表標題 長岡市大武遺跡出土の無文土器系土器について
３．学会等名 新潟考古学談話会例会
４．発表年 2022年

１．発表者名 森貴教　青木要祐　佐々木繁喜
２．発表標題 上越市下馬場遺跡出土黒曜石製石偶の石材原産地推定
３．学会等名 日本文化財科学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 森貴教
２．発表標題 新潟の弥生時代石器・鉄器研究の現状と課題
３．学会等名 新潟県考古学会2022年度秋季シンポジウム
４．発表年 2022年

１．発表者名 桑原久男
２．発表標題 紫雲出山遺跡と高地性集落研究
３．学会等名 京都大学2021年度考古学談話会大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 若林邦彦
２．発表標題 金属器生産からみた弥生～古墳時代変化
３．学会等名 国立歴史民俗博物館共同研究公開セミナー
４．発表年 2022年

１．発表者名 宇佐美智之，桑原久男，森岡秀人
２．発表標題 UAVおよびGISを活用した高地性集落の調査とデータベース構築
３．学会等名 日本情報考古学会第46回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 森貴教
２．発表標題 弥生時代における「層灰岩」製石器の石材原産地推定
３．学会等名 一般社団法人日本考古学協会第87回総会
４．発表年 2021年

１．発表者名 森貴教
２．発表標題 姥ヶ入南遺跡出土鉄斧の構造―X線CT調査から―
３．学会等名 新潟考古学談話会オンライン例会＃10
４．発表年 2021年

１．発表者名 柚原雅樹・森　貴教・梅﨑惠司・川野良信
２．発表標題 全岩化学組成による吉野ヶ里遺跡出土層灰岩製石器の石材産地推定
３．学会等名 第75回地学団体研究会総会
４．発表年 2021年

１．発表者名 森貴教
２．発表標題 今山遺跡における石斧生産と専門化の評価
３．学会等名 第３回考古学研究会合同例会
４．発表年 2021年

１．発表者名 柴田昌児
２．発表標題 西日本の古代木造船と 海上における人間活動 －瀬戸内海と日本海－
３．学会等名 新潟県考古学会２０２１年度秋季シンポジウム
４．発表年 2021年

１．発表者名 寺前直人
２．発表標題 弥生・古墳時代における攻めと守りの変質とその画期
３．学会等名 歴博国際シンポジウム 戦争とランドスケープと先史社会
４．発表年 2021年

１．発表者名 寺前直人
２．発表標題 東地方水稲農耕定着期における石器の変遷－外部依存と生産・消費システム－
３．学会等名 日本考古学研究会第87回総会セッション１
４．発表年 2021年

１．発表者名 宇佐美智之
２．発表標題 弥生時代における高地性集落の成立過程：GIS空間分析から
３．学会等名 歴史地理学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 宇佐美智之
２．発表標題 GIS可視領域分析を用いた高地性集落の立地と焼土坑の評価
３．学会等名 日本情報考古学
４．発表年 2021年

１．発表者名 森貴教
２．発表標題 弥生時代の層灰岩製石器に対する地球化学分析
３．学会等名 一般社団法人日本考古学協会第86回総会 研究発表要旨
４．発表年 2020年

１．発表者名 森貴教
２．発表標題 新潟の弥生鉄器―姥ヶ入南遺跡出土鉄斧を中心に―
３．学会等名 2021年弥生時代研究会第１回online学習会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計6件

１．著者名 寺前直人　長友朋子　深澤芳樹　孫　晙鎬・中村大介　石川日出志　古屋紀之　佐々木由香　馬場伸一郎　杉山浩平　石黒立人　長友朋子　林　大智	４．発行年 2022年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 288
３．書名 南関東の弥生文化	

１．著者名 森貴教　編	４．発行年 2023年
２．出版社 島崎川流域遺跡調査団	５．総ページ数 96
３．書名 長岡市島崎川流域遺跡群の研究Ⅲ　赤坂遺跡２	

１．著者名 森貴教	４．発行年 2022年
２．出版社 島崎川流域遺跡調査団・新潟大学考古学研究室	５．総ページ数 78
３．書名 長岡市島崎川流域遺跡群の研究Ⅱ　上桐の神社裏遺跡２・赤坂遺跡１	

１．著者名 森岡秀人　櫃本誠一　岸本一宏　大手前大学史学研究所	４．発行年 2021年
２．出版社 神戸新聞総合出版センター	５．総ページ数 508
３．書名 兵庫県の古代遺跡	

１．著者名 若林邦彦	４．発行年 2021年
２．出版社 同成社	５．総ページ数 282
３．書名 弥生地域社会構造論	

１．著者名 森貴教	４．発行年 2021年
２．出版社 島崎川流域遺跡調査団	５．総ページ数 48
３．書名 長岡市島崎川流域遺跡群の研究Ⅰ　上桐の神社裏遺跡	

〔産業財産権〕

〔その他〕

弥生時代高地性集落の再検討
https://yayoikouchisei.jimdofree.com/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	桑原　久男 (HISAO KUWABARA) (00234633)	天理大学・文学部・教授 (34602)	
研究分担者	若林　邦彦 (WAKABAYASHI KUNIHIKO) (10411076)	同志社大学・歴史資料館・教授 (34310)	
研究分担者	柴田　昌児 (SHIBATA SYOJI) (10735286)	愛媛大学・埋蔵文化財調査室・教授 (16301)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	田畑　直彦 (TABATA NAOHIKO) (20284234)	山口大学・埋蔵文化財資料館・助教 (15501)	
研究分担者	國下　多美樹 (KINISHITA TAMIKI) (30644083)	龍谷大学・文学部・教授 (34316)	
研究分担者	山本　亮 (YAMAMOTO RYOU) (30770193)	独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・研究員 (82619)	
研究分担者	森　貴教 (MORI TAKANORI) (30775309)	新潟大学・人文社会科学系・准教授 (13101)	
研究分担者	寺前　直人 (TERAMAE NAOTO) (50372602)	駒澤大学・文学部・教授 (32617)	
研究分担者	宇佐美　智之 (USAMI TOMOYUKI) (60838192)	京都芸術大学・芸術学部・講師 (34319)	
研究分担者	伊藤　淳史 (ITO ATSUSHI) (70252400)	京都大学・文学研究科・助教 (14301)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	伊藤　宏幸 (ITO HIROYUKI)	淡路市教育委員会	
研究協力者	荒木　幸治 (ARAKI KOUJI)	赤穂市教育委員会	
研究協力者	福家　恭 (HUKE TAKASHI)	長岡京市埋蔵文化財センター	
研究協力者	池田　保信 (IKEDA YASUNOBU)	天理市教育委員会文化財課	
研究協力者	上田　裕人 (UEDA YUTO)	和泉市教育委員会	
研究協力者	今井　真由美 (IMAI MAYUMI)	関西大学博物館	
研究協力者	三好　玄 (MIYOSI GEN)	大阪府教育委員会	
研究協力者	戸塚　洋輔 (TOTUKA YOUSUKE)	彦根市	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	田中　元浩 (TANAKA MOTOHIRO)	和歌山県文化財センター	
研究協力者	前田　敬彦 (MAEDA TAKAHIKO)	和歌山市立博物館	
研究協力者	久住　猛雄 (KUZUMI TAKEO)	福岡市埋蔵文化財センター	
研究協力者	信里　芳紀 (NOBUSATO YOSHIKI)	香川県埋蔵文化財センター	
研究協力者	塩冶　琢磨 (ENYA TAKUMA)	三豊市教育委員会	
研究協力者	西村　葵 (NISHIMURA AOI)	島根県立八雲立つ風土記の丘	
研究協力者	岩本　真実 (IWAMOTO MAMI)	米子市経済部文化観光局文化振興課	
研究協力者	濱田　竜彦 (HAMADA TATUHIKO)	青谷上寺地　遺跡整備室	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	河合　忍 (KAWAI SINOBU)	岡山県教育庁	
研究協力者	川部　浩司 (KAWABE HIROSI)	斎宮歴史博物館	
研究協力者	石井　智大 (ISHII TOMOHIRO)	三重県埋蔵文化財センター	
研究協力者	堀　大介 (HORI DAISUKE) (00913641)	仏教大学・教授	
研究協力者	深川　義之 (HUKAGAWA YOSIYUKI)	鯖江市教育委員会	
研究協力者	林　大智 (HAYASHI DAICHI)	石川県埋蔵文化財センター	
研究協力者	安中　哲徳 (YASUNAKA TETUNORI)	石川県埋蔵文化財センター	
研究協力者	荒田　敬介 (ARATA KEISUKE)	神戸市文化スポーツ局文化財課	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	園原　悠斗 (SONOHARA YUTO)	兵庫県教育委員会	
研究協力者	石丸　恵理子 (ISHIMARU ERIKO) (50510286)	広島大学総合博物館	
研究協力者	櫻井　拓馬 (SAKURAI TAKUMA)	三重県埋蔵文化財センター	
研究協力者	柴田　将幹 (SHIBATA MASAKI)	田原本町教育委員会	
研究協力者	朝井　琢也 (ASAI TAKUYA)	川西市	
研究協力者	菊池　望 (KIKUCHI NOZOMI)	東京国立博物館	
研究協力者	鶴来　航介 (TURUKI KOUSUKE)	福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課	
研究協力者	鈴木　崇司 (SUZUKI TAKASHI)	駒沢大学	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	ロラン　ネスプルス (LAURENT NESPOULOUS)	東洋言語文化大学・准教授	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関